



おかげさまで、実証試験場職員は全員無事でした。(新潟県中越沖地震被災翌日、片付け作業中の職員昼食風景)

## 目次

新潟県中越沖地震による実証試験場の被災について	「海藻おしば」のブースを出展 ……………10
ご報告とご支援御礼 ……………2	海生研レビューの開催……………10
実証試験場の被害について ……………3	発電所の取水口を詰まらせる新手の迷惑生物 ……………11
これまでの実証試験場の歩み ……………4	集中豪雨により中央研究所構内で土砂崩れ発生 ……………11
研究紹介	人事異動 ……………12
環境保全・環境調和におけるビオトープネットワークの視点 ……5	研究成果発表 ……………12
トピックス	行事抄録 ……………12
韓国電力研究所 環境アセスメント担当者の海生研訪問 ……10	海生研への寄附のお願い ……………12

# 新潟県中越沖地震による柏崎実証試験場の被災について

## ご報告とご支援御礼

さる7月16日に発生した柏崎市を中心とした新潟県中越沖地震により、私共の柏崎実証試験場も少なからず被害を受け、ようやく復興のめどが立って参りましたので、ご報告をしたいと思います。

当日は、祝日でしたが、所内には、数名の職員がおり、心配されましたが、幸い重大な人身事故は無く、不幸中の幸いでした。しかしながら、所内の海水ろ過装置を中心とした機械設備や飼育水槽の破損、足の踏み場も無い実験室の器具やロッカーの散乱の様子を報告された写真で見ると改めて地震の大きさが感じられます。さらに原子力発電所が、停止したため、発電所構内からの、海水、温排水の供給がストップし、停電も続いたため、止むなく、実験生物も破棄せざるを得ませんでした。

この地震に際し、たくさんの皆様から、直ぐに安否の問い合わせや、丁寧なお見舞いをいただき感謝しております。また、停電により、冷蔵・冷凍保管が不可能となった一部実験試料の保管を快く引き受けて頂いた関係機関にも深く感謝しております。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

理事長 弓削 志郎

当初は、復興にどのくらいかかるのかと途方に暮れておりましたが、試験場の職員の精力的な頑張りにより、思いの外短期間に場内の整理がつき、発電所構内からの取水も自然海水だけは、稼働中の補機用水の経路から取水できる可能性が確認され、配管も重大な損傷は、見られないとの点検結果が報告され、現在最低限の自然海水の導入の検討をしております。

また、国等からの委託研究業務については、幸いにして、地震以前に実験計画が順調に消化されていたこともあり、一部の実験計画を御宿の中央研究所に移管する等の手当てをすることにより、本年度分については、十分対応できる見通しであります。

発電所の再開については、未だ明らかになっておりませんが、温排水の影響を現場レベルで実証するという当実証試験場の目的を中心とした研究調査活動は、海洋生物環境研究所の設立の原点のひとつであり、これを今後も高いレベルで維持するため、職員一同これからも最大限の努力をいたしますので、皆様のなお一層のご支援をお願いする次第であります。



実証試験場の被害概要

## 実証試験場の被害について

実証試験場長 太田 雅隆

平成19年7月16日に発生した「新潟県中越沖地震」によって、柏崎市荒浜に立地する実証試験場は甚大な被害を受けました。



(国土地理院HP 電子国土利用作成)

この度の被災に関して、多くの方々、関係機関の方々からお見舞い、ご支援を頂戴いたしました。ここで、あらためて深謝申し上げます。

不幸中の幸いと申しましょうか、おかげさまで、所員に人的被害はありませんでしたし、本館等の建物への被害も比較的軽微でしたが、一時的に電気、水道等の供給が停止しました(電気は19日、水道は31日に復旧、ガスはプロパンで停止無し)。

最も深刻な問題は、お隣の柏崎刈羽原子力発電所から供給していただいている温排水、自然海水が取放水施設(ポンプ室、送水管等)の損傷によって停止し、現在も送水出来ない状態にあるという事です。また、試験場内の受水槽・濾過槽・貯水槽にもひびが入って使用不能となり、配管や試験設備、水槽等も大きな損傷を受けました。このため、海水を用いた多くの実験が続行出来なくなり、試験に用いるために飼育していた約6,000個体の海産生物も保有することが出来なくなりました。放流することが出来る一部の個体は前浜に逃がしましたが、ほとんどのものは死なせることになり、丹誠込めて飼育していた技術員や研究者には断腸の思いであった事と思います。

なお、実証試験場での実施が困難な研究は、既に一部を御宿にある中央研究所に場所を移して実施中であり、今年度の研究計画への被災の影響を最小限にとどめるよう努めています。

現在、海生研では対策チームを作り、国をはじめ関係機関のご支援をいただきながら、一丸となって災害からの復興に当たっております。

実証試験場の生命線である自然海水の確保に関しては、発電所からの送水1系統には大きな損傷の無いことがようやく確認できたことから、早期海水確保に向け、規模を限定した当面の復興計画を進めております。

一日も早い復興を実現し、海生研本来の温排水影響に関する業務に復帰したいと考えておりますので、ご指導、ご支援の程、お願い申し上げます。

### 被災直後の実証試験場



上段左より：自然海水・温排水取放水設備ピット内、貯水タンク配管損傷、本館居室内、生理実験室、

下段左より：屋外10t水槽群(脚部及び配管損傷、集卵槽落下破損)、貝類実験室、海藻培養室、生理実験準備室

## これまでの実証試験場の歩み

ここでは、今回の地震で被害を受けた実証試験場について、これまでの「歩み」を簡単にご紹介いたします。

昭和50年、海生研設立当初から組織構想案の中で、室内実験を中心とし、同時に全国的な現場調査を展開できる体制として、事務局、中央研究所及び地域研究所（構想当時の実証試験場の名称）の3事業所とすることが検討されていました。

海生研設立後の昭和51年には、太平洋側に開設されることとなった中央研究所に対し、日本海側に位置し、かつ当時建設中であった柏崎刈羽原子力発電所の隣接地に、地域研究所は開設されることとなりました。

その後、基礎的実験や現地調査を主体とした中央研究所が昭和54年11月に完成し、さらに5年後の昭和59年11月、隣接した発電所から自然海水と温排水を導入し、より実証的な試験研究を行うことを主眼に、実証試験場が完成いたしました。竣工式には関係省庁を始め、地元県・市、関係諸機関等から200名を越す出席を賜り、各方面より寄せられる関心と期待の大きさが感じられました。



開設当時の実証試験場の様子：敷地内の4本の白い線が、長水路です。

開設当初の実証試験場では上の写真のように、敷地内に自然海水と温排水を同時に流すことのできる長さ100mの長水路4基を備え、実験室内と実際の海域とをつなぐ、中間的スケールの実証的試験研究を行いました。その後、流れと水温が各種

海藻類の成長に及ぼす影響試験、水温が各種魚介類の成長や成熟に及ぼす影響試験等を行い、多くの成果を出してきました。同時に温排水を利用して、試験に用いる海生生物を長期にわたり飼育してきました。また近年では、沿岸環境を広く視野に入れて、魚介類に及ぼす微量化学物質の影響についても調査を行い、成果を出しているところです。平成元年には、敷地内に温排水資料展示館が完成し、これまでの調査研究成果を広く一般に提供してきました。



地震被害前、最近の実証試験場の様子(平成19年5月撮影)：写真中央の建物が、温排水資料展示館です。

最近では、これまでの活動が地域の方々に知られるようになり、環境教育に関する地元小中学校からの協力依頼（海生研ニュースNo.95等）や飼育技術に関する地元漁協からの協力依頼が増えており、積極的に対応してきました。

また平成18年10月には、柏崎市、刈羽村と共催し、地元荒浜漁業振興組合さんのご協力も得て、実証試験場では初めての一般公開を実施し（海生研ニュースNo.93）、350名を越える方々が来場され、私ども海生研が実施している調査研究に対する関心の高さが感じられました。

（事務局 企画グループ 山田 裕）

## 環境保全・環境調和におけるビオトープネットワークの視点

近年、生態系や自然環境の保全に対する国民の意識が高まり、発電所に限らず様々な事業に際しては、環境への配慮が強く求められています。環境影響評価法でも、「その他の環境の保全についての配慮が適正になされるようにそれぞれの立場で努めなければならない」(第三条、一部抜粋)とされています。当研究所では、経済産業省原子力安全・保安院の委託を受けて「発電所海域ビオトープネットワーク確立調査」を実施して、発電所が潜在的に持っている諸効果を活用し、対象海域の環境特性・生物特性に即した沿岸海域の環境保全・環境調和としてのビオトープ(生物生息場)形成、すなわちビオトープネットワークの技術的考え方を提案しました。

### 経緯と目的

これまでに、発電所海域の環境保全・環境調和のニーズ(地域の諸計画、地域共生、漁場保全への貢献など)に対応することを目指して、発電所が潜在的に有している環境保全・改善効果に関する検討を実施してきました(第1図)。本調査は、実海域での生物生息状況の実態調査やシミュレーションによる生物生息適地の予測評価を行い、発電所の立地・運転に伴って形成される生物生息場(発電所ビオトープ)に関する技術的な検討を実施しました。

### 発電所ビオトープの基本的考え方

ビオトープとは、景観生態学の用語、概念で、野生生物の生息に適した景観単位としての3次元空間(生物生息場)を意味します。そして、多くの生物種の生活には、複数の異質なビオトープが必要です。磯魚の1種、メバルの例(第2図)では、成魚は主に水深60m以浅の岩礁域に生息していて、ここで冬季に産仔します。仔稚魚は、はじめ浮遊生活を送り、春季に沿岸の藻場に着底します。そして、成長に伴って、より深場の岩礁域へ移動します。天然の状態では、異質なビオトープがネットワークを形成することによって多くの生物種の生活が成り立ち、その海域の特性に見合った生物群集が成立し

ていると考えます。

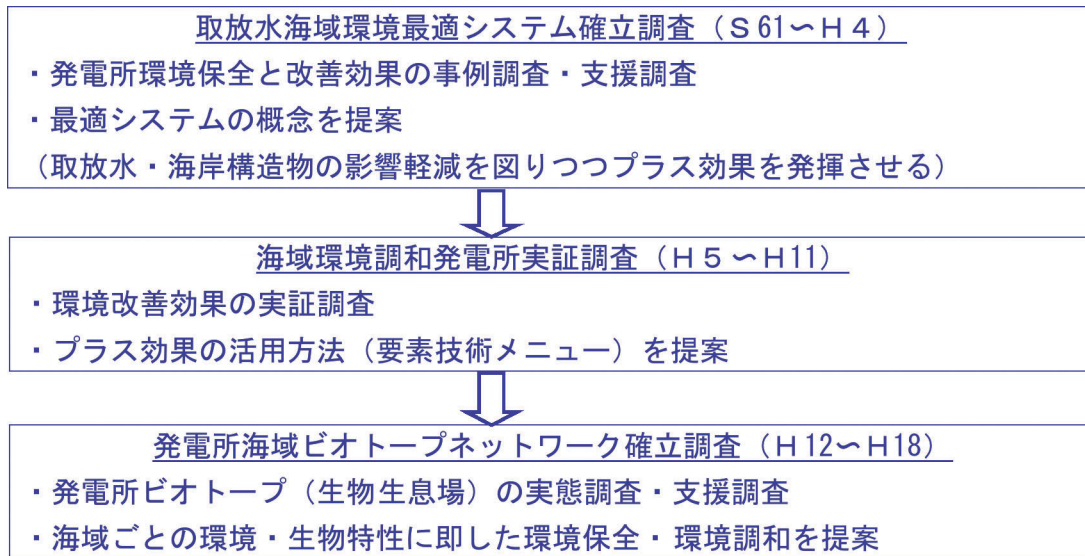
発電所の立地・運転に伴って生物の生息に適した条件の場(発電所ビオトープ)が創出されると、周辺のビオトープとネットワークを形成することによって、その場に見合った生物群集が成立します。言い換えると、発電所ビオトープは、その海域のビオトープネットワークに取り込まれることによって、生物群集が成立すると考えることができます。

本調査では、主要な発電所ビオトープとして、取放水域ビオトープ、海岸構造物域ビオトープ、海岸構造物周辺砂泥域ビオトープの3つの場面を想定しました。

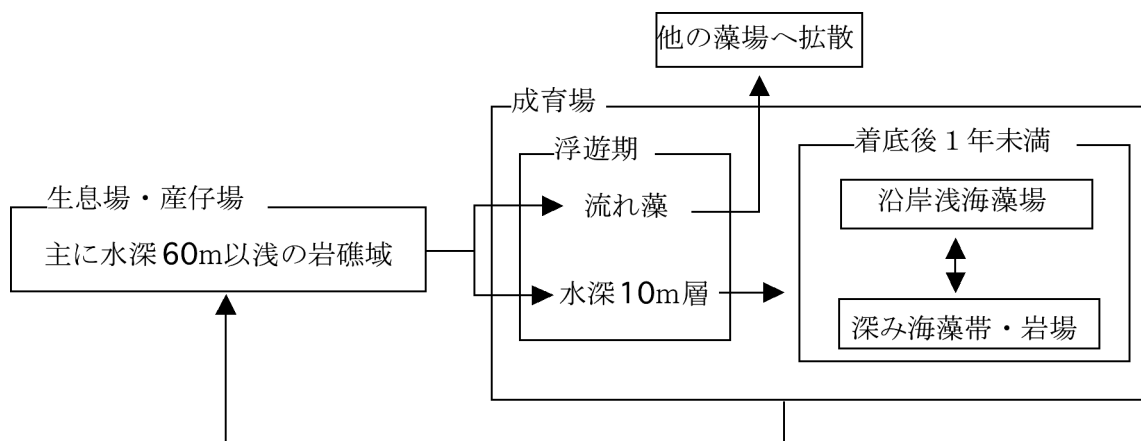
取放水域ビオトープは、魚類が温排水放水域に集まる効果を利用したもので、広温性魚類や亜熱帯～熱帯性の魚類が、周年あるいは季節的に温度上昇域を利用します。

海岸構造物域ビオトープは、防波堤、護岸、消波堤などを海藻や底生動物の生息基質として活用するもので、海域によって構成種は異なりますが、日本全域で広く適用が可能です。

海岸構造物周辺砂泥域ビオトープは、防波堤などの海岸構造物による波浪・流動環境の変化が、砂泥域で底質状況を変化させる効果を利用したもので、特に外海域では二枚貝の稚貝や成貝の大量発生を引き起こすことがあります。



第1図 環境保全・環境調和に関する調査の流れ



第2図 メバルの生活史と移動の様子

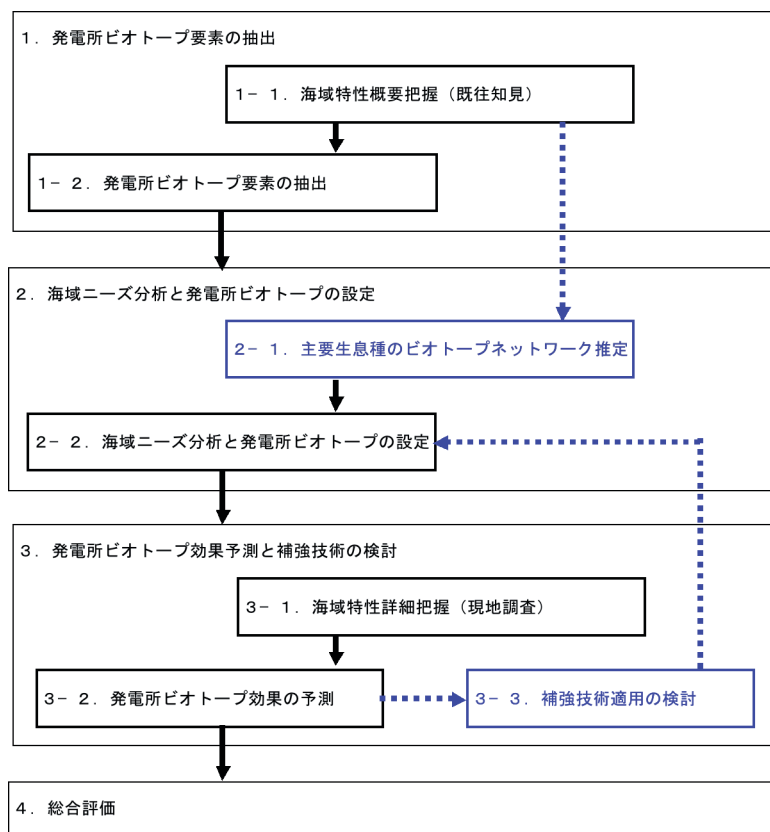
### 発電所海域ビオトープネットワーク形成手順の考え方

発電所の立地に際して、環境保全・環境調和技術として発電所ビオトープ創出を検討する場合、まず、既往知見から得られる海域特性の概要と発電所立地の基本計画の特徴に基づいて、発電所ビオトープとなる要素を抽出します(第3図の1)。

次に、対象海域のビオトープネットワークに発電所ビオトープを取り入れた状況を想定して、対象海域の諸ニーズに即した発電所ビオトープを設定します(同2)。

次いで、海域特性の詳細を把握する現地踏査や海域調査などを実施して、これから発電所ビオトープの効果(規模, 機能)を予測します(同3)。この際、予測される効果を設定した海域ニーズと比較して、必要に応じて、好適化・調和技術による効果の補強を検討することができます。

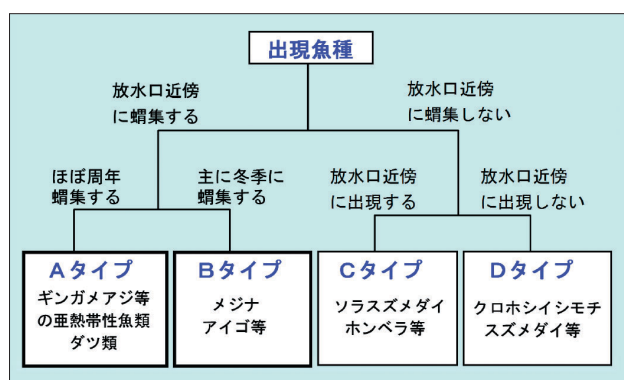
そして、この予測結果を、発電所の本来機能や対象海域の利活用状況などと照らして、総合的に評価するとともに、効果に不確実性が伴う場合は事後調査の実施を検討します(同4)。



第3図 発電所海域ビオトープネットワーク形成手順

### 取排水域ビオトープとネットワークの実例

長崎県西岸に立地する火力発電所周辺海域で現地調査を実施して、この海域の魚類が温排水による昇温域との関係から類型化され、ほぼ周年にわたり放水口近傍に蛸集する魚種、主として低水温の冬季に蛸集する魚種があることを示しました(第4図)。



第4図 火力発電所周辺海域の魚類の類型化(長崎県西岸)

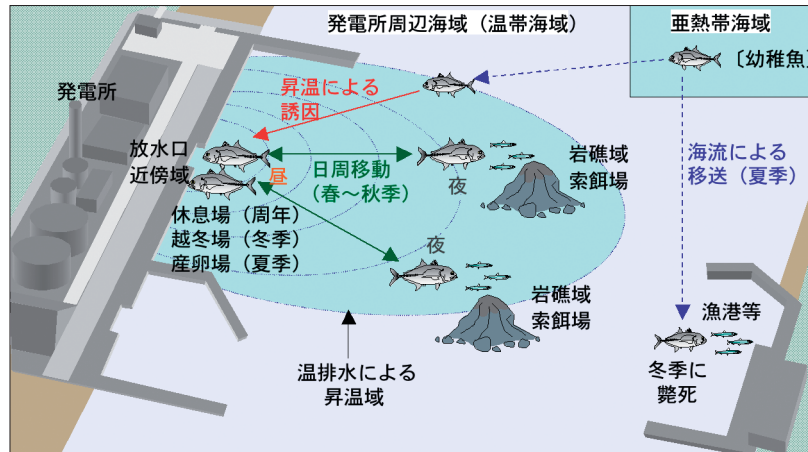
このうち、周年にわたり放水口近傍に蛸集するギンガメアジをモデル魚種として、水温・塩分、流

向・流速分布等の環境条件調査、潜水目視観察、採集調査、バイオテレメトリー調査、屋内水槽での温度反応試験を実施しました。その結果から、蛸集魚類に、季節的、日周期的移動によるビオトープネットワークが形成されていることを示しました(第5図)。

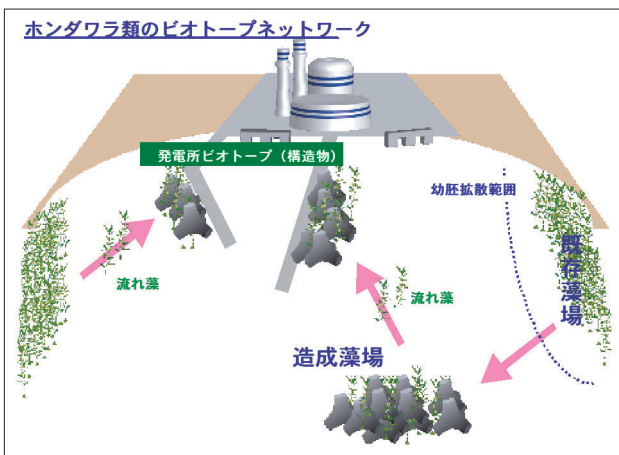
### 海岸構造物域ビオトープとネットワークの実例

若狭湾西部の火力発電所の周辺海域で現地調査を実施して、護岸等の海岸構造物に形成されるガラモ場には流れ藻によるビオトープネットワークが形成されていることを示しました(第6図)。

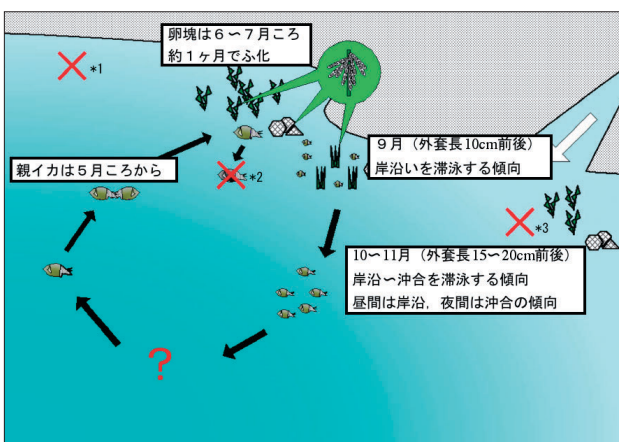
また、このガラモ場に卵塊を産着するアオリイカについて、潜水目視観察、採集調査、バイオテレメトリー調査などを実施しました。その結果から、生活史に伴う移動によるビオトープネットワークが形成されていることを示しました(第7図)。



第5図 火力発電所周辺海域におけるギンガメアジのビオトープネットワーク



第6図 火力発電所周辺海域におけるホンダワラ類のビオトープネットワーク

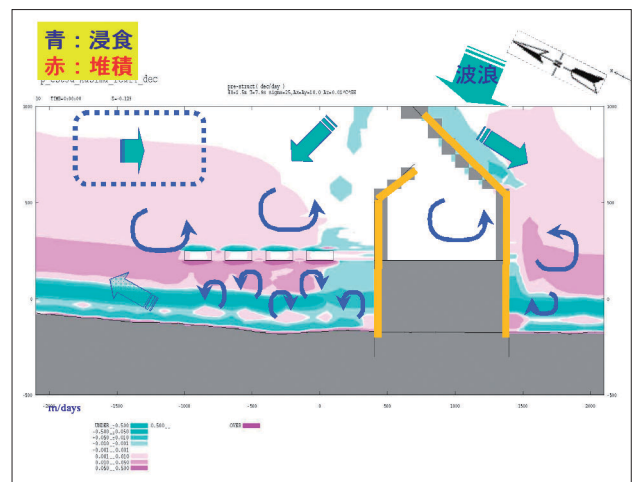


第7図 若狭湾西部海域におけるアオリイカのビオトープネットワーク

- \*1 砂浜域では産卵基質がない
- \*2 親イカは産卵後に斃死
- \*3 低塩分に耐性が無い

### 砂泥域の海岸構造物周辺ビオトープの形成予測

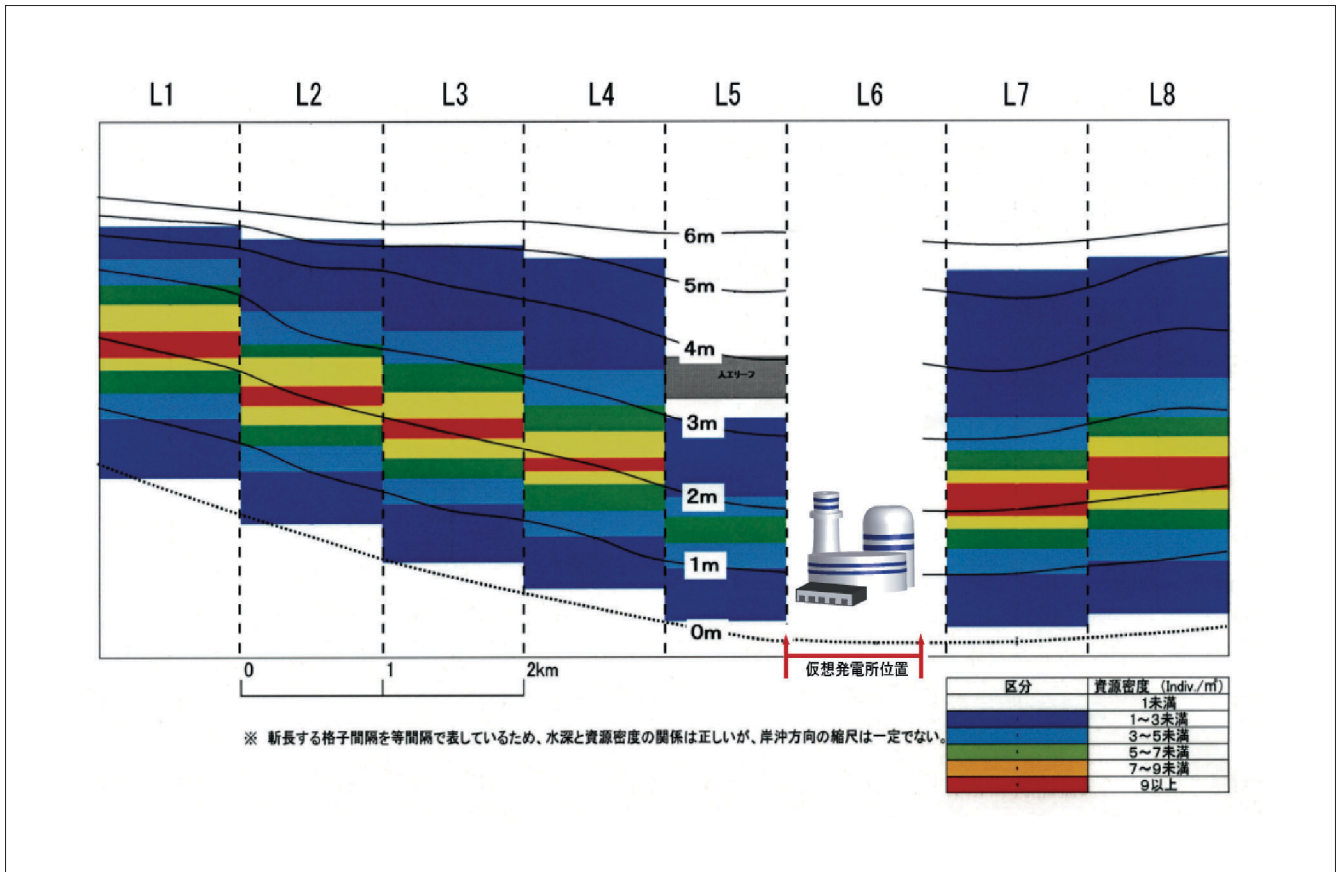
沿岸流モデル、波浪場モデル、海岸流モデル、漂砂モデルからなる物理環境予測モデルを構築し、茨城県鹿島海域において、仮想発電所(港湾)と人工リーフを設置した場合の海底の砂面変動を予測しました(第8図)。



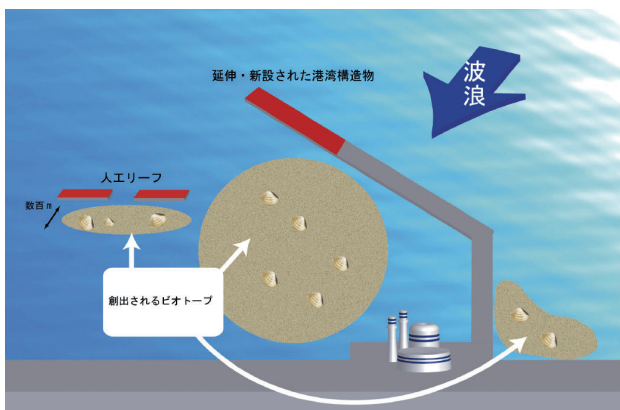
第8図 鹿島灘における仮想発電所(港湾)周辺の物理環境変化予測

また、水深、軌道流速、泥分率、シールド数、中央粒径とチョウセンハマグリ分布状況の関係から、環境要因の適正指数を点数化するHSI (Habitat Suitability Index) Modelを構築して、仮想発電所(港湾)周辺の生息状況の変化を予測しました(第9図)。以上の結果に基づいて、港湾構造物周辺に砂泥域ビオトープが形成されることを示しました(第10図)。





第9図 鹿島灘における仮想発電所(港湾)周辺のチョウセンハマグリ(ハマグリ)の分布変化予測



第10図 港湾構造物および人工リーフ周辺に形成される砂泥域ビオトープ

### おわりに

本調査では、地方・地域の公共団体や住民のもつ方向性を踏まえて環境情報を把握して、周辺の環境と連携して本来の自然の機能を保全する自然調和の視点を持ちました。それには、複雑でより広

範な環境系・生態系に即した総合化の技術展開が求められ、ここでは、基本的要素として生物種とその生活史を取り上げ、多様なビオトープ(生息場)のネットワーク化の検討を行いました。

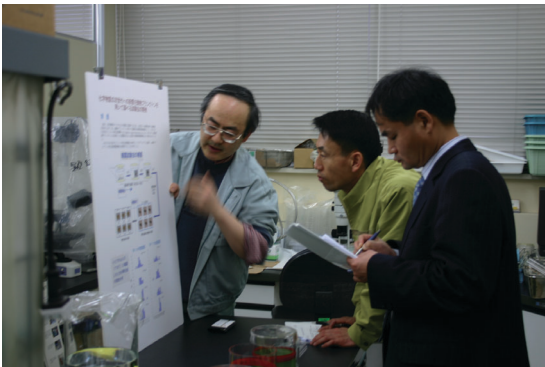
今後は、提案した手順にしたがって実証的な試験調査を行い、実効性を検証するとともに、ビオトープ形成手法を適用した場合の環境・生物の変遷過程を追跡して、対象生物の出現時期と生息場の時空間的関連を明らかにし、事後調査の時期と地点の効果的設定法などを検討することが求められます。そして、生態系と調和した計画案を検討過程から示すことによって、社会的合意形成の円滑化に資することができると思います。

(中央研究所 海洋環境グループ 山本 正之)

## 韓国電力研究所 環境アセスメント 担当者の海生研訪問

2007年3月に、韓国電力研究所 (KEPRI) 環境構造研究所で、発電所の環境アセスメントを担当している Seok-Soon Park さん (グループリーダー, 化学専攻) と Yeon-Shik Kang さん (主席研究員, 植物プランクトン学専攻) が中央研究所を訪問され、実験施設見学の後、中央研職員と懇談を持ちました。

KEPRIからの海生研訪問は2006年11月のEum環境構造研究所長とChoi 同研究所主席研究員に続くもので、2006年度中の韓国電力関係者の海生研訪問は9月の韓国水力原子力発電株式会社の訪問と合わせ3組となりました。



室内実験結果の説明

写真左より、中央研 伊藤総括研究員, Kangさん, Parkさん。

以前にもご紹介しましたがKEPRIは韓国電気事業の中央研究機関で、環境と土木建築を担当する環境構造研究所をはじめ発電、原子力など6つの研究所から構成されています。



現場調査結果の説明

写真左より、Parkさん, Kangさん, 中央研 木下所長代理, 山本総括研究員。

Parkさん, Kangさんは、中央研職員との懇談の場で、今後も海生研との交流を一層深めたい、また定期的な情報交換する機会を持ちたい旨の意向を示されました。

日韓の海生生物相は極めて類似しており、環境影響に関する情報交換には大変興味があります。

今後、お互い提供できる情報を再確認した上で、交流のあり方について相談することとしました。

(中央研究所 清野 通康)

## 「海藻おしば」のブースを出展

6月9日、新潟工科大学において柏崎市立教育センター主催の「青少年のための科学の祭典2007柏崎刈羽大会」が開催されました。実証試験場は「海藻おしば」のブースを昨年度に引き続き、出展しました。

新潟工科大学学園祭と同時開催された今年の「科学の祭典」会場には、次々と子供たちが訪れ、「海藻おしば」ブースでは、馬場総括研究員ら職員3名が様々な形の緑藻、褐藻、紅藻の小片を使った「しおり」の作り方を紹介し、大勢の子供たちがしおり作りに挑戦しました。

子供たちが思い思いに海藻を並べて作成したしおりは乾燥とラミネート加工が施され、後日、子供たちの手元へ届けられます。



(実証試験場 応用生態グループ 眞道 幸司)

## 平成18年度海生研調査研究レビューの開催

海生研では、取り組んでいる調査研究課題について役職員が共通の認識をもてるよう、毎年、それらの内容・成果を発表する調査研究レビューを開催しています。

本年も7月12, 13日の両日、平成18年度に実施した委託課題・所内研究課題を対象として、事務局、実証試験場、中央研究所の役職員が参加し、中央研究所にて開催いたしました。

本レビューは、海生研の調査研究分野が年々広がり課題数も多くなり、3事業所で分担実施することから、研究員が相互に意見を交え、理解を深めるよい機会であると同時に、その成果を問われる場ともなっています。

また、本年度は特に、試験生物の提供という役割で、調査研究活動を支えている中央研究所・実証試験場の飼育チーム、および情報提供という役割を担う中央研究所の情報チームの活動内容も紹介し、日頃研究員の気づかない側面を認識する機会ともなりました。

海生研では、このような意見交換・論議の場を通して、調査研究活動のいっそうの充実と、よりよい成果の達成を目指していきます。

(中央研究所 片山 洋一)

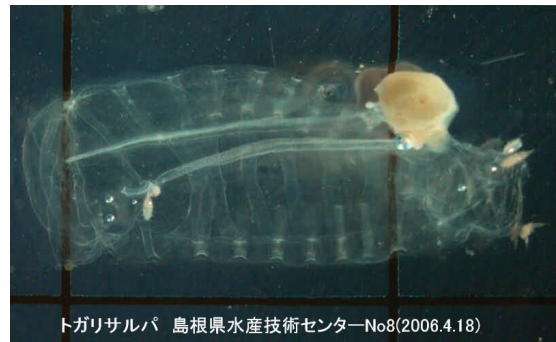
## 発電所の取水口を詰ませる新種の迷惑生物

今年の5月、日本原子力発電株式会社敦賀原子力発電所(福井県敦賀市)の取水口にトガリサルパという約5cm程のプランクトンが大量に押し寄せ、取水スクリーンを通過、復水器系統のフィルターを詰ませ、その一部を破損させる事態を引き起こしました。このため、同発電所は1ヶ月近く発電出力を40%近くまで低下させることとなり、大きな損害を被ってしまいました。同時期、トガリサルパは富山湾氷見の定置網にも大量に押し寄せ、網の目が詰まるなど、漁業者を悩ませました。

さて、このトガリサルパとは、いったいどのような生物かご存じでしょうか。分類上は、脊索動物門尾索動物亜門に属す比較的高等な生物です。われわれ人類が属する脊椎動物亜門も脊索動物門に属しますから、サルパと人類は同門となります。尾索動物亜門は、タリア綱(サルパ綱)の他、マボヤの属するホヤ綱、オタマボヤ綱の3つの綱で構成され、共通するのは、浮遊幼生の時期にオタマジヤクシの形をしており、プランクトン生活をする点、その時期には、内臓などは頭部に、長い尾の部分に脊索や、背側神経索、筋肉が存在することです。しかしその後、ホヤは柔軟性のある被嚢を作って付着生活を送るのに対し、サルパ類は溶けにくく、腐りにくいビニール製のオモチャの様なゼラチン状の被嚢を作って浮遊生活を送ります。

島根県水産技術センターのとびうお通信号外(2006.4.18)によると、サルパ類の大量発生は近年多くなっているそうです。平成12年に日本海の広い範囲でトガリサルパ大量発生が報告され、その後、平成16年にはオオサルパ、18年にもトガリサルパの大量発生がありました。その原因については、海水温の上昇などが考えられていますが、は

っきりとしたことはわかっていません。



海生研ニュース83号(2004.7)で報告したように平成10年以降、数年にわたって日本海の海水温が高めに推移し、日本海西部で東シナ系群のサワラが捕れるようになりました。また、近年、エチゼンクラゲが対馬暖流に乗って北上し、日本海沿岸から青森県、岩手県に至る広い範囲で定置網などの漁業被害が起こっています。広域の環境変化が思いも寄らない生物現象として災いをもたらしているのではないのでしょうか。日本周辺の海域環境の変化について、今後とも注視していきたいと考えております。

(中央研究所 海洋環境グループ 藤井 誠二)

## 集中豪雨により中央研究所構内で土砂崩れ発生

本年7月14日夜半、台風4号に伴う集中豪雨により中央研究所構内に面した斜面の崩落が多数発生しました。本館中央西側の急斜面から土砂と樹木が崩れ落ちて通路を塞ぎ、斜面に沿って設置されていた水道管が破損しました。プレハブ実験室では山側の壁が壊れて土砂が流入し、またフェンスが数箇所倒れました。幸いなことに本館や実験棟など主要建築物や人的な被害はありませんでした。翌日には雨が上がったため、二次災害に注意しながら通路の土砂樹木の排出や水道管の修復旧作業を行いました。



本館西側の土砂や樹木の撤去作業

中央研究所の南西約10kmのところに位置する勝浦測候所の観測データ(気象庁ホームページより)によると、14日の24時間降水量は337mm、23時20分には1時間降水量が105mmを記録していました。これらの値はいずれも勝浦測候所過去100年間の観測史上2番目の値となっています。

大変稀な集中豪雨ともいえますが、現在中央研究所では、台風や集中豪雨による斜面崩落被害の再発防止のため、危険が予想される斜面下部に防護柵の設置を進めています。

(中央研究所 木下 秀明)

## 人事異動

[事務局]

◎平成19年7月31日付

・中村 良一 研究参与退職

◎平成19年8月31日付

・佐藤 肇 職員定年退職

◎平成19年9月1日付

・佐藤 肇 研究参与採用(コーディネーター研究調査グループ担当)

## 研究成果発表

### 口頭発表

- ◆堀田公明・岸田智穂・瀬戸熊卓見・佐藤裕介・道津光生(海生研)、足立伸次(北大院水)  
「性分化中および後のシロギス生殖腺に及ぼすエストロジェン曝露の影響」  
9/25~28 日本水産学会秋季大会(函館)

### 論文発表等

- ◆喜田 潤、渡辺雄二((株)環境総合テクノス)、白山義久(京大)、吉川貴志、林 正裕・石松 惇(長崎大)(2007).  
海洋生物に及ぼすCO<sub>2</sub>海洋隔離の急性影響・月刊 海洋, 39(6), 383-388.
- ◆渡辺雄二・石田 洋((株)環境総合テクノス)、喜田潤・吉川貴志、三戸彩絵子((財)地球環境産業技術研究機構)、竹内和久(三菱重工(株))、白山義久(京大)(2007).  
CO<sub>2</sub>海洋隔離による海洋生物個体群・生態系への影響・月刊 海洋, 39(6), 397-401.

## 行事抄録

- ( )表示のないものは東京で開催
- 7/3 第1回核燃料サイクル施設沖合データ解析専門委員会  
7/4 第1回原子力発電所等周辺データ解析専門委員会  
7/10 第1回海洋放射能検討委員会  
7/12, 13 海生研調査研究レビュー(御宿)  
7/18 第1回化学物質魚介類汚染調査検討会  
9/18 第1回藻場資源の長期変遷調査技術検討会

## 海生研へのご寄附のお願い

海生研は、発電所の取放水等が海の環境や生息する生物に与える影響を科学的に解明する中立的な調査研究機関として、農林水産省、経済産業省、環境省の共管のもと、昭和50年に設立されました。特に、生物と温度の関係について専門的に調査研究を行う独立の研究機関は、国内はもとより外国にも例のないものです。

海生研は、国や民間からの受託研究の他、民間からの寄附金により運営されており、大規模発電所の取放水が生物に及ぼす影響の解明を中心に、食の安全・安心や海生生物の保護にかかわる海洋環境中の微量化学物質や放射能の実態把握等の調査研究を実施しております。

海の中の生物やその環境との係わりについては複雑で奥深いものがあり、地域性を含めて未だよく解らないことが多く残されています。長期的な展望に立ち、計画的・安定的に調査研究を推進することで、これら残された諸課題をさらに解明するためにも、更なる基盤の充実を図る必要があります。

何卒皆様からのご支援・ご寄附をお願い申し上げます。なお、当財団は主務大臣より「特定公益増進法人」としての認定を受けておりますので、ご寄附いただいた方に対しては、税法上の優遇措置が講じられています。

振込先口座 三菱東京UFJ銀行 新丸の内支店  
普通預金口座 4345831  
口座名義 (財)海洋生物環境研究所  
理事長 弓削 志郎

海生研ニュースに関するお問い合わせは、  
(財)海洋生物環境研究所 事務局までお願いします。  
電話(03)5210-5961